江戸時代，東西医学の対話

——吉雄幸左衛門耕牛を中心として——

片桐 一男

青山学院大学名誉教授・文学博士，東京，〒156-8366 渋谷区渋谷4-4-25

Bridge between Oriental and Western Medicine in Edo era

——Featuring Dr Yoshiwo Kozaymon Kogiu——

Kazuo KATAGIRI

Professor Emeritus, Aoyama Gakuin University, 4-25 Shibuya 4-chome, Shibuya-ku, Tokyo 150-8366, Japan

Abstract

Dr. Yoshiwo Kozaymon Kogiu (1724-1800) was a Dutch interpreter in Nagasaki in Edo period. His private school was very successful where practical Dutch Medicine based on Dutch language education was taught. His theory was based on Dr. Buyzen's theory called "Verhandelinge van Uitwerpingen des Menschelyke Lighaams". The resource of his private school was the proceeds gained by "van Swieten Liquid" for the treatment of syphilis.

His theory strongly affected the medical society in Edo, including Dr. Maeno Ryotaku and Dr. Sugita Genpaku and later spread all over Japan.

He opened his own theory and knowledge. He also shared his intellectual property and treatment technique with his disciples. His way of thought was so modern and shared with the trends in the present days.

Key words: Dutch physician, van Swieten Liquid, Dr. Buyzen, Dr. Yoshiwo Kozaymon Kogiu, Dr. Maeno Ryotaku, Dr. Sugita Genpaku, In-eki-Hatsubi, Goeki-Shinpo

要旨

長崎の阿蘭陀通詞吉雄幸左衛門耕牛の成秀館塾は〈オランダ語教育〉のうえに〈オランダ流医学〉の実践教育をして、きわめて盛況であった。それは、ボイセンの『人体の排泄物についての論』という医学理論に立脚、〈スウィーテン水〉による画期的治療効果によってもたらされる〈財〉の〈有効活用〉に支えられていた。これが、古医方出身の前野良沢・杉田玄白ら江戸の医学界にも強く影響、全国に普及をみた。

〈理論・情報の公開〉〈技術の共有〉〈財の使用倫理〉問題という現代医学界の抱える問題にも、そっくり共通している。

キーワード: 蘭方医、スウィーテン水、ボイセン、吉雄耕牛、前野良沢、杉田玄白、「因液発備」、「五液診法」

今日の講演会の構成をみますと、4題あります。中国で、話は起承転結の構成にすることだそうですね。そういう点で今日はちゃんと起承転結になっておりまして、3番めは方向転換の話ということでございます。ちょうどお昼を済ませたあとで、いちばん眠い時間で、その眠い時間に眠らせないようにするというのは大変な努力が必要、起承転結の転、後で結のりっぱなお話でまとまると思いますので、しばらくご清聴いただきたいと存じます。

本日頂戴しました題は「東西医学の対話」という

ことですが、少し焦点を絞りまして、吉雄幸左衛門（耕牛）と、よく名前の知られている杉田玄白等を登場させて話を進めさせていただこうかと思っています。お手元にレジュメを差し上げてありますので、年表を随時ごらんいただきながら話を聞いていただけたらありがたいと思います。

I 阿蘭陀大通詞にして成秀館の蘭方医

日本における実証医学の出発として杉田玄白の『解体新書』はその金字塔であるといえましょう。杉田玄白が師事した先生が吉雄幸左衛門耕牛です。

鎖国禁教下の日本で、長崎出島、唯一ヨーロッパとの関係というオランダですが、その接点、第一線に立ったオランダ通詞、通訳官は、その副業として医学の研修を兼ねた人がいちばん多い、と出島に来たオランダ商館付きの商館医、シーボルト、ツェンペリーたちが言っています。そういう中で、大通詞で成秀館塾を経営した吉雄幸左衛門は最も代表的で、大御所的存在であったと思われます。

鎖国時代、江戸時代の長崎出島が脚光を浴びましたのは、1641年から開国に至るまで218年間です。その間、東西の出会いの第一線に立ったのは通訳官であるというわけです。出島にはオランダ商館があり、商売をしに来ているわけですが、必ずお医者さんが一人ついてきています。有名なところでは、いわゆる出島の三学者といわれている、元禄時代にやってきたドイツ人医師のエンゲルベルト・ケンペル、それから杉田玄白が『解体新書』を著した翌年に来たスウェーデン人医師のカール・ペーター・ツェンペリー、それから、文化・文政期の蘭学がかなり発達したところに勢い込んでやってきたドイツ人医師のフィリップ・フランツ・フォン・シーボルトです。

今日は、カール・ペーター・ツェンペリーと吉雄幸左衛門に目を向けてみようと思っているわけです。

II スウィーテン水をわがものとして

1. スウィーテン水

ツェンペリーは、日本に来て本国に手紙を出している中で「現在、日本では性病が大変蔓延している。これまでは煎じ薬で治療するだけでした。私は、今年、江戸や京都の医師、オランダ商館の通詞らに性病に対する水銀水療法を一生懸命教えました。オランダ通詞は私の教えに従ってすでに長崎で水銀水を使って大勢の患者を治療しました。その処方、蒸留水、昇汞、適量の砂糖またはシロップである」と言っています。

ツェンペリーが持ってきました薬物、昇汞ですが、日本で需要があるだろうと思って持ってきたようです。昇汞、塩化第二水銀ですが、当時、日本の医師たちは使用法がよく分からない、有効ではあるらしいけれども危険を伴うので使い方が分からないというわけで、流涎（salivation）療法については理解していたようですが、非常に危険なのでなかなかできなかったのです。そこで、少量の昇汞を彼らに与え

も被成候由、一段之御事、医と申候者ハすれハする程如、意ハ不参者ニ御座候、治毒薬水被仰越候、是ハ阿蘭陀ソツピルマ四分ニ白砂糖四々水百二十め是を合候て、一度ニ四々ツ、日、三度大麦湯ニ合ツ、ニて薬水ニ引続用候事ニ御座候、左無之て悪心腹痛等有之候、目方ハ從症一分迄ニ及申候、俗情ニて目分量ハ能く存候得共、治療之事ハ左様ニてハ無之候、別て吉益家ハ其所甚様ニ被存候、御勘弁有之度事御座候、兎角老煉ならてハ合点不参事御座候、恐惶謹言

八月廿日
小林令助様

杉田玄白
翼（花押）

図1 小林令助宛杉田玄白書翰（部分）

て、それを水に溶解してシロップを添加してどのように使用するかということをお示ししたのです。最初は手をつけなかったようですが、やがて大勢の乞食同様の人にやってみたと記録しています。そうしたら、奇跡が起きたと思うほどよく効いて、治療効果が抜群であったと書いているのです。この梅毒に対する水薬、スウィーテン水といっているわけですが、これがどのように日本に伝えられて効果をあげていったのかということをお示ししたいと思います。

それをごくかいつまんでお示ししたいと思います。スウィーテンは、長年観察に努めて臨床実験、診療を通じて確認し、これを発表したのが1754年です。翌年、一気にヨーロッパにこれが広がりました。それをツェンペリーが日本に持ってきたということからしますと、ちょうど20年後に日本にもたらされたということが分かります。

表1 『紅毛秘事記』中の加減方

	水 (g)	昇汞 (g)	蜜 (g)	昇汞濃度 (%)	1回量中の昇汞 (g)	1日量中の昇汞 (g)	
スウィーテンの原処方	モルトワイン 2 pound (746.48)	12gr. (0.78)		0.104	0.0156	0.0312	0.0624 (最高量)
『紅毛秘事記』中の標準処方	96銭 (360.0)	9.996厘 (0.374)	1 銭 (3.75)	0.103	0.0155	0.0309 (2回投与)	0.0464 (3回投与)
吉雄氏加減方	120銭 (450.0)	5 厘又は 7 厘 (0.188 or 0.263)	4 銭 (15.0)	0.040 or 0.057	0.0061 or 0.0085	0.0121 or 0.0169 (2回投与)	0.0181 or 0.0254 (3回投与)
今村氏加減方	120銭 (450.0)	5 厘又は 3 厘 (0.188 or 0.113)	4 銭 (15.0)	0.040 or 0.024	0.0061 or 0.0036	0.0121 or 0.0073 (2回投与)	0.0181 or 0.0109 (3回投与)
強方	96銭 (360.0)	3.33分 (1.249)	1 銭 (3.75)	0.342	0.0513	0.1027 (2回投与)	0.1540 (3回投与)
又方	193銭 (723.75)	3 分 9 厘 (1.463)	1 銭 (3.75)	0.201	0.0301	0.0602 (2回投与)	0.0903 (3回投与)

スウィーテン水の処方、昇汞が12グレイン、グレインというのはオランダの単位です。モルトワインが2ポンド、これを薬史学会の高橋文先生にグラムに換算して検証していただきましたら、昇汞は0.78グラム、モルトワインは746.48グラムということです。飲ませ方は、朝晩一匙ずつ、症状が頑固な場合、最高で倍量まで服用させてもいい、こういう具合です。高橋先生の検証から得られた数値を申し上げますと、0.104%液になります。

これがどのように日本に伝わって、正確あるいは不正確に伝わったかということが大事な点だと思われます。先生方にこんなことを申し上げるのは釈迦に説法だと思いますが、お薬は、足りなければ効果がないし、多すぎれば害になる、危険で、場合によっては命にかかわりますから、適量が処方されることが大事で、そこがどのように伝わったかというのは非常に大事だと思います。

2. 『紅毛秘事記』

『紅毛秘事記』という写本があります。これは吉雄幸左衛門が記録したもので、未刊の本です。長いスウィーテン水の紹介がありますが、さわりのところだけ申しますと、ワートル、エーンホント、日本の分量で96銭目。先ほど、第2席のお話で非常に

いい薬は高い、20万円するという話でしたが、メルクリウス、ケレイン六ツ、これが昇汞です。メルリス(蜜)がエンコース、使用法は1日2～3度、1度に4銭ずつ、朝、昼、夕、合計12銭、これを服するによく振り立てて用いる。

これを同じく高橋先生に換算していただきますと、96銭は360グラム、メルクリウスが1.666厘×6、0.374グラム、メルリスが1銭、3.75グラム、そうしますと0.00103092783と出てくるわけで、昇汞の0.103%液であるというわけです。先ほど0.104%という数字が得られたのですが、ほとんどそっくり正確に伝わっているということが立証されたわけです。1回の場合、2回の場合、3回の場合とかけ算をしてみればよいわけです。

3. 杉田玄白の天真楼塾と門下生

吉雄幸左衛門、長崎のオランダ通詞兼蘭方、オランダ流医者が処方したことがその後どうなったか。目のつけどころは、この人に師事した杉田玄白にどう伝わったかというところで、それを示すのが門弟小林令助に宛てた玄白の手紙です(図1)。

杉田玄白の弟子、小林令助は、杉田玄白の江戸の天真楼で学んで帰り、いろいろ疑問点を先生に長い手紙で聞いています。それに対し玄白先生は長い手

図2 野村立栄宛免状

図3 授吉雄家学之秘条

紙で教えている。そういうやり取りがあります。

杉田玄白は非常にオープンに教えていたようで、ここに数値が出ていて、こういうのは極めて珍しいことです。私も長年関心を持ってきましたが、初めてこういうものにめぐりあうことができてびっくりしました。企業秘密をあっさりと書いています。白砂糖が4匁、水が120匁、これを同じく高橋先生に換算していただきますと、昇汞1.5グラム、白砂糖15グラム、水450グラム、これによって0.32%の昇汞液であるということがわかったのです。

スウィーテンが開発したいいわゆるスウィーテン水という梅毒に対する極めて画期的な薬、その処方しかた、水薬が20年後に日本に上陸し、たちまちのうちに吉雄幸左衛門から杉田玄白に伝わり、小林令助に伝わっているということが、はっきりした数字をもってほぼ正確に、というより、私に言わせれば

非常に正確に伝わっているというわけです。一匙ずつ与えるのと3回与えるのと、許容範囲があります。

表1は、上段がスウィーテン水の原処方で、昇汞濃度というところに目をつけていただきたいのです。0.104%、その下の『紅毛秘事記』のは0.103%、吉雄氏加減方、今村氏加減方というのは通詞のまさにさじ加減ということになるわけです。場合によってはこれぐらい与えてもいいよという強い用方を示していますが、強方、0.342%です。杉田玄白が小林令助に与えた処方の0.32%というのは、原処方の0.104%と強方の0.342%の間にぴったり入っていて外れていない、安全である、許容範囲内で水薬がきちんと伝えられているということです。伝令ごっこみたいがいいかげんに伝えられたのではないということがこれではっきりしたわけです。さすがに、少なければ効果はない、多ければ危険なのだからとい

う点がここによく表れている，そういう点を読みとっていただけたらと思うわけです。

吉雄幸左衛門は成秀館という塾を張り，700人とも，1000人を越えたともいわれる門弟子がいた，その秘密はどこにあったのかというのが長年の疑問点でした。それから，杉田玄白の天真楼も，杉田玄白自身が流行医となり，お弟子さんも大変多かった，その秘密はどこにあったのか。『解体新書』を出したからと思ったら大間違い，今のような出版事情と違い宣伝効果はないわけです。あんな本を一冊出したからといって，流行医になれるはずがないのです。そういう点で，スウィーテン水を吉雄幸左衛門と杉田玄白がわがものにしたということは大きな要素であったと思うわけで，そう言わざるをえないのです。

Ⅲ ボイセンの『人体の排泄物についての論』をわがものとして

1. 家学の秘条・著訳書・蔵書

吉雄流の蘭方というものがどういうものであったか検証しておく必要があろうかと存じます。ただ，特効薬的なスウィーテン水だけに頼っていたということではなく，むしろしっかりした基盤の上にスウィーテン水を取り入れたから隆盛な塾を張ることができ，また，お弟子さんが画期的に多かったということだったと思うのですが，その吉雄流がどういうものであったかということです。

図2は免状です。それとは別に「授吉雄家学之秘条」と題し秘伝を箇条書きしています(図3)。免状に「当流秘事相伝之上者」といっているところが

非常に大事で，当流というのは吉雄流だということ，ほかとは違うんだ，それは秘事だ，誓詞をもって伝ええると言っていますから，多くに教えることではないということです。秘伝です。

その内容ですが，秘条というところを解説してみますと，第1が紅毛文字，第2が紅毛方言，第3から第10までが医学内容です。何としても語学が大事であるということを行っているわけです。ここにお集まりの先生がたは医学部を出ていらして，皆さん語学に長けていらっしゃると思うのですが，吉雄流，吉雄幸左衛門は非常に語学をしっかりやった。彼のサインはきれいですね，素晴らしく格好のいいサインをしている。横文字のはんこまで押してある。しっかりと語学教育を一般教養として，基礎科目としてやらせています。3から10までの8法が専門履修科目だということだろうと思います。

そうしますと，この免状はまさに大学の卒業証書で，吉雄の家学の秘条というのはいわば履修科目と単位証明書に当たると思われます。このように見ますと，吉雄スクールの構成がよく理解できるのではないのでしょうか。この内容を知りたいわけですが，細かい説明がないので困ります。そこで，一つの方法として，700人とも1000人ともいわれたお弟子さんたちが先生から教わった秘伝のノートを見ることができればと思い，捜しました。

そこで書目を作ってみますと，表2のごとく38点を数えることができます。全部写本なのです。ということは，吉雄大先生には公開するという意思は全

表2 吉雄耕牛著訳書目録

38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
從魯西亞帝王支那北京帝都へノ勅使道中日記	蘭方瘡瘍説	蘭方書	吉雄流伝書	吉雄大先生膏藥書	吉雄先生雜病伝	吉雄先生雜伝書	吉雄先生雜伝金匱	吉雄先生經驗	吉雄家金創秘書	吉雄家外療書	油露精氣取法	布欽己微毒論	獨獨烏斯本草アベ七類聚	西洋製煉秘録	西洋諸膏藥方	紅毛流水藥秘伝	紅毛流膏藥方	紅毛流膏藥秘方	紅毛流膏藥	紅毛油藥之書	紅毛卷木綿之書伝	紅毛秘事記	紅毛人流膏書并煉方	紅毛膏藥書	紅毛膏藥	金瘡閑書	外本	阿蘭陀流油方	阿蘭陀流膏藥煉書	阿蘭陀流膏藥之書	阿蘭陀油方	和蘭製藥箋	阿蘭陀膏藥方	和蘭永続曆和解	因液發備	阿暮天恵氣留	油水藥之書
	訳								訳			訳				訳	訳	訳		訳				訳						訳	訳				訳	佐	

然ないということが分かるわけです。大勢のお弟子さんたちがみんな写本を作って、それぞれ自分の出身地に持ち帰り診療活動に使うわけですから、似たようなことが多いというのは当然です。

その中でも、大ざっぱに幾つかに分けることがで

きます。皮膚病学者として非常に有名なゲルハルト・ファン・スウィーテン、ヨーゼフ・ヤコブ・フォン・プレнкの影響が大きいということが分かります。そういうものが中心になった薬物が非常に開発されて使われていたということが分かります。特に、

(同右)

蔵書目録（「因液発備」）

20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

僕^{ボク}之^ノ先^{マデ} 失^シ葛^カ馬^バ各^{カク}滅^{メツ}兒^ニ 莫^モ焉^ヤ勞^{ラウ}先^{マデ} 離^リ蠅^{ショウ}兒^ニ失^シ吉^{キチ}的^{テキ} 拔^{ハク}蠅^{ショウ}亞^ア亞^ア兒^ニ 度^ド度^ド奴^ヌ斯^ス 佛^{フツ}剛^{コウ} 回^{ヘイ}斯^ス馬^マ兒^ニ 蒲^フ良^{リョウ}加^カ亞^ア兒^ニ 立^{リツ}蘇^ソ 亞^ア兒^ニ度^ド蠅^{ショウ}活^{カク}先^{マデ} 委^{ワイ}兒^ニ都^ド砒^ヒ屈^{クツ} 多^タ字^ジ麻^マ蘇^ソ 亞^ア陪^{ハイ}底^{テイ}吉^{キチ} 蠅^{ショウ}孫^{ソン}度^ド失^シ葛^カ度^ド 波^ハ兒^ニ砒^ヒ的^{テキ} 砒^ヒ兒^ニ溫^{ウン}婆^パ焉^ヤ莫^モ 粉^{フン}度^ド髒^{サツ}度^ド 面^{メン}的^{テキ}力^{リキ}吉^{キチ}

図4 吉雄塾の蔵書目録

表 3

文化二	一七九〇			二月七日付 玄白、小林令 助にスウイ！ テン水教示
寛政五	一七九三		十月 江馬蘭 齋、蘭化へ入 門（四七七）	
寛政六	一七九四		五月 江馬蘭 齋、蘭語一万 ボイセシ	
寛政八	一七九六		春、吉川宗元 「五液論」第 一篇	
寛政一二	一八〇〇	八月十六日 吉雄耕牛 歿（七七）		
享和三	一八〇三		十月十七日 前野良沢 歿（八一）	
文化元	一八〇四			十一月四日 「五液診法」 開板願い
文化一一	一八一四			玄白、回顧録 脱稿
文化一二	一八一五	冬『因液発備』 刊		『蘭学事始』 成る
文化一三	一八一六			九月『五液診 法』上下二卷 刊
文化一四	一八一七			（序文正月） 四月十七日 杉田玄白 歿（八五）

「一名トゥンベルグ口伝」というサブタイトルがついている写本もあるのです。32番めの『吉雄先生雑伝書』がそれで、これは京都大学の富士川本の写本です。そういう具合に、ツェンベルグの影響がいかに強いということがよく分かるわけです。破門になる門下生というのはどこの塾でもけっこう多いのですが、このように卒業生には卒業証書、単位明細書をつけてあげたというわけだろうと思います。

もう一人、杉田玄白たちが、明和8年、1771年3月5日から『ターヘル・アナトミア』の翻訳を開始したとき、語学ができたのは前野良沢だけで、あとはできなかったのです。杉田玄白が『蘭学事始』で言っていますが、前野良沢を盟主と仰ぎ、先生ともいっています。「盟主」と「先生」とは違うのです。先生は師匠で上下の関係、盟主というのは横の関係で、研究会の会長を受け持っているというわけです。そして、それを使い分けている。前野良沢は、直前に長崎に留学して語学を勉強したことは知られているわけです。実は、吉雄幸左衛門が師だったわけです。

前野良沢が非常に注目した書物があったようです。

Practijk der Medicine, ofte Oeffenende Geneeskunde, Aanmerkingen over het Menschelyke Bloeden Wateren, en Geneeskundige Aanmerkingen. Door HENRICUS

BUYZEN, Med : Doet, en Practizyn te Haarlem, ……1729. (16°, 22ff+246 blz. + 9 ff.)

一癩癧 二卒中 三痲痺 四感冒 五咽喉カタル 六肋膜炎 七喘息 八肺結核と咳 九幼年者の肺結核 一〇咯血 一一熱 一二丹毒 一三食欲過度 一四嘔吐 一五水腫 一六赤痢 一七疝痛 一八下痢 一九腎臓炎 二〇月経閉止 二一子宮病 二二 Vryster Ziekte 二三難産 二四月経過多 二五黄疸 二六麻疹 二七蠕蟲 二八脚痛 二九壊血病 三〇瘡瘍

等の定義・原因・徴候・診断・手当・處方を略述

ボイセンの『Practijk der Medicine』、ボイセンの医学書、吉雄幸左衛門のところの種本であったように思うわけです。吉雄幸左衛門の成秀館塾にあった蘭書を図4に示しておきました。大変高価な蘭書で、今でも何十万円もするようなものばかりだと思います。その2番めに『僕乙先（ボイセン）』というのが出てきますが、これがボイセンの『Practijk der Medicine』です。

2. ボイセンをめぐる長崎と江戸

ここで、年表(表3)を見ていただきますと、安永9年、『解体新書』からあまりたっていないころですが、奥平昌鹿公、前野良沢の中津藩のお殿様がこの年に亡くなっているわけですが、その前に奥平

年表

年						号	吉雄幸左衛門 耕牛門	前野良沢 蘭化	杉田玄白 鵜飼
天明五	安永九	安永四	安永三	安永二	明和八				
一七八五	一七八〇	一七七五	一七七四	一七七三	一七七一	一七七〇	一七六六		
大槻玄沢、長崎遊学		ツェンベルグ「来日」イテ、水伝授		耕牛「解体新書」に序文新		良沢、長崎遊学、一〇日遊吉雄塾			
嶺春泰、斐仙「五診法」	奥平昌鹿、七月二十四日歿(三七)	奥平昌鹿、ボイセンの書を蘭化に与る		三月五日「ターヘル・アナトミア」会読		三月 長崎屋訪問			
			「五校刊」	「五校刊」	玄白「ターヘル・アナトミア」入手、三月四日、腑分、観臓				

公が前野良沢にこのボイセンの書を与えた。それ以前にこれを前野良沢が一生懸命読んでいる。この本を手に入れたい、読みたいと思うようになった原因は、吉雄幸左衛門のところにあったということだろうとだんだん分かってくるわけです。これを前野良沢が読んで、帰って江戸でも翻訳しようとしていたところが、彼はもう年をとっており、目も不自由で、健康状態が悪くて、それで嶺春泰という弟子にやらせるのです。

『Practijk der Medicine』の内容は、30項目あり、実は、付録があったらしくて、お殿様が前野良沢に与えた本にもこれがついていまして、実はどうもこの付録を読んでいたらしいのです。それが *Verhandeling van Uitwerpingen des Menschelijke Lighaams, Rotterdam, 1732.* (『人体の排泄物についての論』) という本です。今日のタイトルにも挙げておきました『五液診法』、五つの種類の液で診断をする、尿、便、汗、よだれ、嘔吐物の五液を見て、質や分量、音、臭み、味、色、何が混じっているか、そういうものから総合判断するという方法です。

それまでの医学界が、触診や脈診だけに頼っていたことからすると、今から考えれば大したことないということですが、当時としては画期的で科学的で理論的でした。吉雄幸左衛門と前野良沢が注目して密かに翻訳を開始したわけです。いわばこういう医学理論の上に、経験的な処方に加えて画期的なスウィーテン水を取り入れ、診療活動を行い、また、医学教育活動を行った、こういうことが分かってくるわけです。

吉雄幸左衛門がこれを翻訳していたという証拠が『因液発備』であります。『因液発備』、「小洩ヲ診スルノ法第一」、小便をうかがい診察する方法だ、こういうのが第1に挙がっていて、病因判定にこれを使うというわけです。吉雄幸左衛門は予告編を出しています。それをそのとおりであると信じたとなると、ボイセンの書の付録のほうを全部訳していたということが分かります。ただし、彼は、生きている間はこれを出版しないで秘伝にしていたというわけです。

前野良沢は前野良沢でお弟子さんにやらせたのですが、嶺春泰が早く亡くなってしまっていて、次の門弟の大垣藩出身の吉川宗元にやらせた。吉川宗元から前野良沢にあてた手紙で確認しているわけで、少な

くとも『五液論』の第1編は完璧にできている、大先生、検閲してくださいというようなことを言っています。宗元もまた亡くなりまして、最後に翻訳を続けたのは同じく大垣藩の江馬蘭斎、47歳にしてこの学に入ったという大変な努力家です。このように、江戸でもこの書に注目して努力が重ねられていたということです。

安永2年に『解体新書』の前段として『解体約図』5枚を出して世間の反応を見たわけですが、それがうまくいったので、今度は自信を持って翌年『解体新書』を出したと、こういうドラマがあるわけなのですが、出すに当たって一悶着も二悶着もあったわけです。前野良沢はこの出版に大反対で、翻訳が不完全だから許可ならんというわけです。しかし、杉田玄白は、公開しないと医学界全体のレベルアップにはならないから絶対出版したいと、両者の意見は合わないわけです。

前野良沢がいなかったらこの仕事はできなかったわけですから、良沢大先生を怒らせてはいけません。人間嫌いで人づきあいが悪くて門弟を取らないと頑張っている前野良沢先生。杉田玄白はすごく人づきあいのいい人で両極端です。片方は語学の達人、片方は語学があまりできない。今の教科書では杉田玄白のほうが偉そうですが、語学の面から見ますと杉田玄白はオランダ語に歯が立たなかった。だから、前野良沢を怒らせてはだめです、出版できません。長崎では、吉雄大先生が頑張っていて絶対公表しないとやっているわけです。それが一つのルールとなり、塾の運営として700人を誇り、1000人を超えたといわれているわけです。一方、江戸においては杉田玄白も隆盛を誇っているわけです。杉田玄白がいちばん専門とした領域は梅毒の治療だったということですから、これは非常にはっきりしています。彼は下町に住んでいますから、すぐ隣には吉原があつていっぱい患者さんがいて、材料には事欠かないわけですから、とてもいい杉田病院です。

『解体新書』が出るとき、江戸では前野良沢大先生と杉田玄白大先生とが相容れない、それまでは必死になって危険な仕事かもしれないというので一致団結して翻訳に従事していたのが、出版ということをめぐる真二つに分かれたわけです。それに今度は、長崎グループというのも関係し、三つどもえです。

図5 吉雄耕牛『因液発備』

図6 江馬蘭齋『五液診法』

そこで、年表と照らし合わせながらご理解いただきたいのですが、何としても医学界を盛り立て、理論の根底にするためにこれが必要であると。必要であるということはだれしも思っているわけで、長崎側も江戸側もそうで、けんかしている先生もそうなのです。しかし、できない。長崎では吉雄幸左衛門が頑張っている、江戸では前野良沢がうんと言わない。どんなにお弟子さんがやきもきしてもできない。

3. 『因液発備』『五液診法』公刊レース

ところが、寛政12年、1800年に吉雄幸左衛門が亡くなりました。それを追いかけるようにして難しい前野良沢先生が亡くなりました。するとその翌年、文化元年に、江馬蘭齋が出版願いを出しているの

す。つまり、公開したい、両巨頭の先生が亡くなったから公開に向かって努力をしている杉田大先生の下でやろうと。なかなか許可は出ないのですが、そのうちに杉田玄白も年を取って弱ってきて、文化11年、やっとの思いで回顧録を書き上げ、清書する余力はなく、いちばんの優等生の大槻玄沢に「清書してよきに計らえ」と伝授して、それが『蘭学事始』となるわけです。

その直後、江戸側で出版したいという大運動が起きます。『五液診法』を出そうとしているわけですが、非常に微妙な面白い競争がここで生じたようです。江戸のそういう動きを、長崎の吉雄幸左衛門スクールにおいても非常にショックを受けています。

「和蘭医方纂要」凡例（蔵書目録部分）

(20) 突奴斯	(19) 亞突活先	(18) 滅姪力吉	(17) 警律煥拔等	(16) 駒送突失各篤	(15) 到麻斯	(14) 芬述面篤	(13) 拔律督的	(12) 亞陪底吉	(11) 委律都砵嶮	(10) 栗斯	(9) 拔擲亞律	(8) 離擲律失吉的	(7) 麻篤嫪斯	(6) 失各篤各蔑律	(5) 回斯篤律	(4) 仏浪各律	(3) 仏剛	(2) 束迷律	(1) 僕乙先
----------	-----------	-----------	------------	-------------	----------	-----------	-----------	-----------	------------	---------	----------	------------	----------	------------	----------	----------	--------	---------	---------

図7 江馬塾の蔵書目録

大先生が出版してはいけないと言ったのだから守りましょうというお弟子さんと、出したほうがいいというお弟子さんに分かれ、もとをただせばわが恩師がやった仕事じゃないか。と、こういうことになります。なにしろ全国にお弟子さんが散らばっていますから、そういうニュースはちゃんとキャッチできていたわけです。それで、大急ぎで、とにかく一番槍はわが先生のほうでなければ納得できないというわけで、文化12年に出したのが『因液発備』です（図5）。

形としては、百百海、お弟子さんたち、タイトルページを見ますと、「吉雄永章先生口授、門人洋椿氏著」となっていますが、中身を見るとそうではなく、洋椿編集ということになっていますから、大先生の翻訳をお弟子さんたちが寄って盛り立てて出版にこぎつけたという様子がありありと分かるわけです。予告編があって「後編」が「近刻」されるような口ぶりで予告してあります。

そういう中で、江戸のほうも一生懸命やりまして、翌年、文化13年に『五液診法』を江馬蘭斎の名前で上下2巻出します（図6）。今も大垣の江馬家に伝

えられたのが岐阜県歴史資料館にあります。漢文の本と、和文の本と二種です。中身を見ますと「小洩ヲ診スルノ法第一」、同じじゃないですか、本文も同じ、『因液発備』と一字一句違わないのです。今ならこんなことは許されるでしょうか（笑）。

吉雄幸左衛門の塾が、大変高価な蘭書をそろえて全国から集まった門弟に勉強させた、語学を重視したと先ほど言いましたが、その蔵書が日本中の輝くばかりのものがそろっているわけです。全国でこんなにそろっている塾はないです。ところが、文化13年に江馬蘭斎の養子さんの元弘先生が出した本『和蘭医方纂要』を見てみますと、義理のお父さんが序文を書いている、その凡例の中に、わが江馬塾はこういう蘭書をそろえているという蔵書目録がのっています（図7）。

それを見ますと、順序は違いますが、吉雄塾の蔵書目録と同じです。何十万、何百万もする蘭書を大垣藩の塾がそろえられるのでしょうか。手に入れられるのでしょうか。百歩譲ってお金があったとして、こんなに手に入れることができたでしょうか。確かに、江馬塾では蘭書を手に入れて、今は京都大学の図書

館にあり、私が点検して目録を作り「京都大学図書館所蔵蘭書目録」(『蘭学資料研究会研究報告』第100号, 1961)に載せておきましたが、むしろこのリストに入っていない蘭書がいっぱいある。実際にある蘭書の目録をつけたほうが誇れるのではないかと思うのですが、そうしないで借り物のようなのを載せるというのはなんたることでしょうか。(笑)

何を言いたいかというと『五液診法』はすごいですよということを言いたいわけです。今のような出版事情とか著作権法なんかもありませんからいいのかな。今日の午前中のご発表を聞いたら、あんなに一刻を争うような非常に高度な情報を発表していいのかなんて素人が心配するぐらいでありました。あれはどこでチェックするのだろうかとか心配するわけです。

法的なことはいったん脇に置きまして、長崎でも江戸でも、当時の先端に行く蘭方の先生たちは、塾において、あえていうなら医学における大学において、こういうものを最高のものと認めて扱っていたということが、これでよく分かると思うわけです。

杉田玄白は、『蘭学事始』の中で、『解体新書』が出たときに長崎の通詞社会において波紋が起きたというようなことをごくあっさりと言っていますが、実は、こういうどぎつい競争があったということがまざまざと分かるわけです。

IV 見えてきた現代的意義

今日の話を整理してみますと、話の内容は古いことで、お集まりのご熱心な先生がたの役に立つような話ではありませんが、いろいろなことが見えてくるわけです。当時、先端を行った担当者である吉雄幸左衛門、前野良沢、長崎の先端に行く先生たちでも江戸の先端に行く先生たちでも、ボイセンの『人体の排泄物についての論』を非常に画期的な理論として用いた、これをベースにしたということがはっきりいたしました。そのうえにスウィーテン水という薬の処方方をわがものによって、長崎では、700人、1000人を超えるというダントツのスクールを発展させた。江戸では、杉田玄白が大きな働きを展開していた。こういうことがよく分かったかと思います。

もう一つ見えてくることは、秘伝から公開へということでもあります。そもそも『解体新書』を出すときからの大問題で、公開したからこそ歴史的意味が

ある。だから、日本における近代実証科学の出発はここにあるといわれているわけで、現今の情報公開問題とびったり同じだと思うわけであります。

それから、漢方と蘭方との関係ということも考えさせられる。実は、前野良沢も杉田玄白も、医学系統からしますと漢方の先生で、その中でも古医方の流派の出身です。ですから、実際の処方や診療活動は漢方の上に乗っかっていると言っていいと思います。そのうえにスウィーテン水のような輸入薬と輸入の処方のしかた、技術がある。ですから、情報の公開と技術の共有ということがここで大きな問題となり、現今と同じではないでしょうか。

そのことを漢方古医方の中に入れた人と入れない人との間の連絡、摩擦、あるいは運動ということがこれから大きく問題化して出てきた、もっともっと検証しなければいけないかなと思っているわけです。実は、小林令助は地方へ帰って、杉田玄白の教えも実践しますが、なお吉益東洞流の先生にもついている。それで疑問があるとまた杉田玄白に質問して、そっちへ行くなどか言われている。つまり、漢方と蘭方と相互乗り入れしている面が随分あるのではないか。飽くまでも情報公開と技術の共有でやらなければいけないということであろうと思うわけです。

ところが、有効な薬というのは高価なのです。したがって、この場合もなかなか、輸入の、オランダ船が持ってきてくれる蘭方の薬物は高い、手に入らない。それで、杉田玄白は『蘭学事始』の中であっさりと言っています。当時の蘭方医、蘭学者は、「代薬がちにてぞありける」と。代わりの薬、和流の薬、いかにして高価な薬を日本の薬剤で作るかということでもあります。だから、蘭学者は代薬発見のために勉強しているようなもの、代薬を見付けることが第一の仕事であったといっても過言ではないと思います。

つまり、国際交流なんていうと聞こえはいいですが、交流というのは、難しい、大変な面も持っているわけで、新しい病気、新しい菌の発見、そういうものが入ってくると、新しい薬の開発、新しい処方が求められる。それが高価であれば代薬を求める、今も同じことをやっているわけです。パターンは全く同じです。

そして、その次が実は大問題なのであります。吉雄幸左衛門の場合でも、杉田玄白の場合でもよく分

かるのですが、とても高価な蘭書を整備している。杉田玄白のごときは、オランダ語はあまりできませんでしたが、滝沢馬琴の収入の何倍もあった収入、そのお金をつぎ込んで蘭書を買った、自分は読めなくても弟子に読ませるために本を買いあさった。情報の独占、技術の共有ということをめぐって、それが財を生むということ、お金を生むのです。そのため、吉雄幸左衛門の塾が繁栄したのです。杉田玄白の天真楼塾は天下に名をとどろかせたわけです。その得られた財の使い道が大事です。吉雄、杉田という二人の巨頭はこうに塾における内容の充実・整備に使ったわけです。

今の医学界の財、お医者様というのはみんなお金持ちでいらっしゃるそうですが、大学も同じ問題を抱えていると思いますが、財をどのように活用する

か。心が大事なのです。すなわちここに哲学が必要で、それが最大の問題ではないかと思うわけです。理論・情報の公開、技術の共有、財の使用法、生きている人間のすることですから心と哲学が必要だということなのではないかと改めて痛感させられます。

あまりお役に立たない古い話で、起承転結の転で、気分転換をしていただいたお話だったと思いますが、ご清聴ありがとうございました。(拍手)

〈参考文献〉

片桐一男：『江戸の蘭方医学事始—阿蘭陀通詞・吉雄幸左衛門耕牛—』（丸善ライブラリー311）

2000年，丸善

片桐一男：『平成蘭学事始—江戸・長崎の日蘭交流史話—』2004年，智書房